

「矯正治療の開始時期について ～下突咬合、叢生歯列弓の転医症例から～」

群馬県前橋市開業 さいとう矯正歯科 齋藤 卓麻

成長発育期の症例では、成長発育を可能な限り予測して具体的な治療目標を設定する。そのうえで、現時点で治療の必要性があるかどうかを判断し治療開始時期が決定される。

また永久歯列完成が間もない症例については、治療の効率化ということも考慮し、永久歯列完成を待っても問題ない場合には治療開始を遅らせることもある。

現在の不正咬合の形にばかり目を奪われて安易に治療を開始すると、治療が長期間となり患者さんの負担が大きくなってしまふことがある。

その一例として、前医（一般歯科医）で10歳から約6年間にわたり矯正治療を受けた後、治療途中で当科へ転医した下突咬合症例について報告する。

症 例

初診時年齢：17歳0ヶ月

性別：女性

主訴：前歯部反対咬合の改善、上顎左右第一小臼歯の抜歯スペースの閉鎖

診断：下突咬合、偏位咬合

治療方針：

上下顎骨の前後的なずれは軽度であるが、舌癖が強く下突咬合の治療が難航することが予想されたため、外科手術を併用した矯正治療を提案したが、長期間にわたり治療を受けてきたこともあり患者さんは希望されなかった。このため舌癖のトレーニングを行いながら、下顎左右第一小臼歯を抜歯して矯正治療単独で治療を行うこととした。

治療経過：

再レベリングの後、通法に従いclass III elastic、oblique elasticを併用しながら、犬歯の遠心移動および前歯の後方移動を行った。この間、毎回の調節後に舌癖のトレーニングを行った。動的治療期間は2年0ヶ月である。保定装置は、上顎にはplate type retainer、下顎はfixed retainerを装着した。

治療結果：

前歯部の被蓋は改善されたが、右側臼歯部はIII級関係であり、左側第一大臼歯の咬合も緊密ではない。長期間にわたる治療のため、患者さんは治療を継続することが難しくなり、十分とはいえない状態ではあったが装置を撤去した。

【略歴】

齋藤 卓麻（さいとう・たくま）

1986年3月 新潟大学歯学部卒業

1990年3月 新潟大学大学院歯学研究科修了

1990年4月 新潟大学歯学部附属病院矯正科助手

1995年4月 さいとう矯正歯科（群馬県前橋市）開設